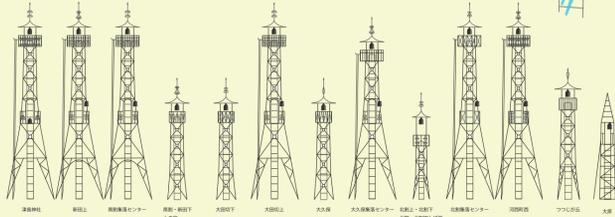


櫓に寄り添う ～自治再建への狼煙～

火の見櫓

異なる形状・装飾・構造が織りなす多様な表情は火の見櫓に秘められた無類の魅力である。櫓のデザインにも集落ごとに独自の装飾が施されており、アノニマスなデザインがもたらす安心感や親密感を感じることのできる土木構造物と言える。



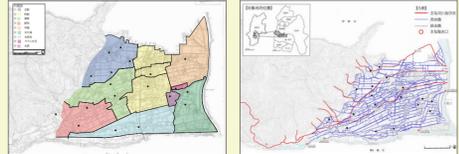
風景

農村集落において集落の風景を一望可能な見晴台は稀有であり、風景を後世に継承していくための貴重な視座となる。



立地

現各行政区に散らばるように立地し、かつすぐ側を村中に張り巡らされた水路が通る。



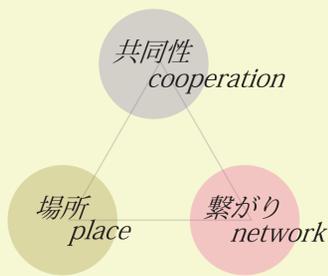
-宮田村-
長野県上伊那郡宮田村
面積：54.52 ㎢
人口：9,266 人

-地勢-
中央アルプスと南アルプスに囲まれ、山から川までの一連の地理環境がコンパクトに村内に収まっている自然環境に恵まれた地勢を持っている。

コンセプト

通信技術の急速な発達、縦割りの防災体制、社会基盤整備の行政への一任委譲により、かつて生活の中で培われていた集落の自治力は劇的に脆弱化した。そして今、集落の自治意識の象徴であった「火の見櫓」が時代に淘汰され、取壊しを余儀なくされてきている。無用の長物と化してしまった集落自治の象徴に新たな機能を付加することで、集落の自治力を再建する。

自治を育む3つのファクター



火の見櫓の持つ特性を活かすことで3つのファクターを集落に創造する

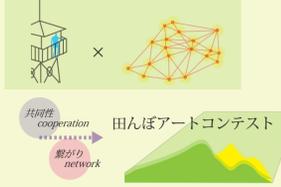
提案

火災をいち早く発見し、集落を守るために建てられた火の見櫓には、集落を見渡すことのできる①視座場という特性、集落の要所に建つ②立地特性、そして各集落に存在している③分布特性の3つの特性が備わっている。この3つの特性を活かし、火の見櫓に集落の自治を育むための機能を付加することで、火の見櫓に新たな命を吹き込む。

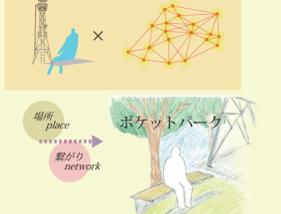
火の見櫓の特性



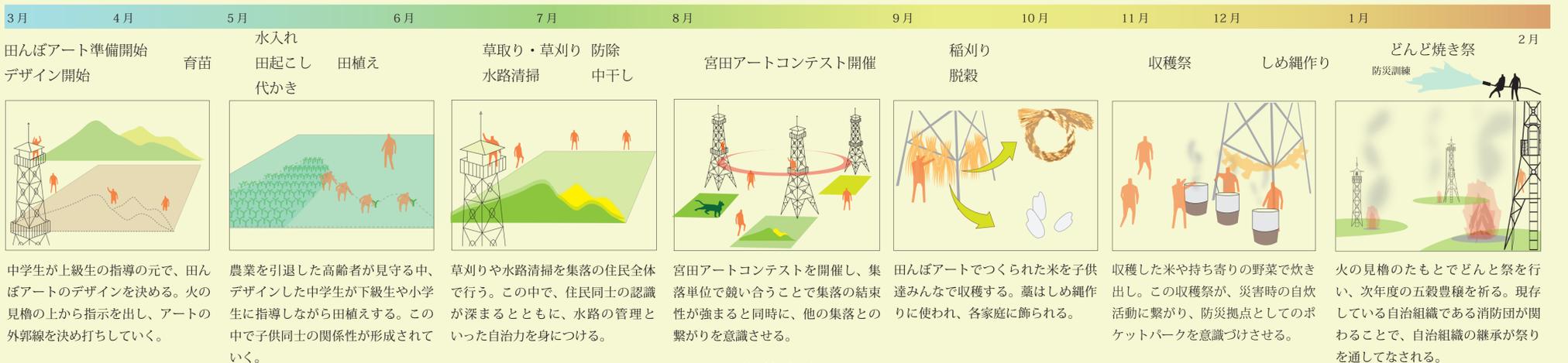
ソフト面からの提案



ハード面からの提案



歳時記



中学生が上級生の指導の元で、田んぼアートのデザインを決める。火の見櫓の上から指示を出し、アートの外郭線を決め打ちしていく。

農業を引退した高齢者が見守る中、デザインした中学生が下級生や小学生に指導しながら田植えする。この中で子供同士の関係性が形成されていく。

草刈りや水路清掃を集落の住民全体で行う。この中で、住民同士の認識が深まるとともに、水路の管理といった自治力を身につける。

宮田アートコンテストを開催し、集落単位で競い合うことで集落の結束性が強まると同時に、他の集落との繋がりを意識させる。

田んぼアートでつくられた米を子供達みんなで収穫する。薬はしめ縄作りに使われ、各家庭に飾られる。

収穫した米を持ち寄りの野菜で炊き出し。この収穫祭が、災害時の自炊活動に繋がり、防災拠点としてのポケットパークを意識づけさせる。

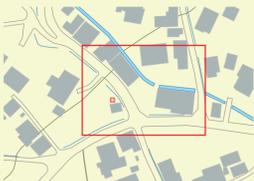
火の見櫓のたもとでどんどと祭を行い、次年度の五穀豊穡を祈る。現存している自治組織である消防団が関わることで、自治組織の継承が祭りを通してなされる。

集落自治



ポケットパークデザイン提案

対象地



対象地である北割集落は、火の見櫓が集落の中心に位置し、側には水路や川が流れ、また集落センターをもつ。ここを集落の拠点であり、自治を育む空間の提案を行う。



空間提案

「ハレ」の日には様々なアクティビティーの場所、「ケ」の日には憩いの場所となる空間を提案する。集落・防災・憩いの拠点づくり。

平面図



断面図

